〔下學集下草木〕莧ヒユ侯澗反、莧與鼈不可合食、莧葉裹鼈甲、以土覆之、一夜變爲鼈也、

〔和爾雅七菜蔬〕莧ヒユ　馬齒莧スベリヒユ馬莧、五行草並同、　白莧マヒユ大者曰白莧、又云人莧、　野莧クサヒユ小者爲野莧、又云糠莧、　蕢アカヒユ爾雅云、赤莧曰蕢、

〔東雅十三穀蔬〕莧ヒユ　義不詳、倭名鈔に本草を引て、莧味甘寒也など見えし事もあれば、或は其性の寒なるによりて、此名有けんもしるべからず、ヒユとは、冷をもいふが故也、莧を染色具に、本草註を引て赤莧あり、莖葉純紫不堪食之と註せしは、これをもて染料となしける也、また陶隱居本草を引て、馬莧一つに馬齒莧、漢語抄にウマヒユと註せしは、卽今俗にスベリヒユといふ是也、

〔物類稱呼三生植〕莧ひゆ　東國にてひやうと云、奥津輕にてひやうあかざといふ、加賀にてはびやうと云、馬齒莧、相模にていぬひやうと云、加賀にてずんべらびやうと云を、江戸にてすべりびやうと云、

〔倭訓栞前編比二十五〕ひゆ○中略　和名抄に莧をよめり、性冷の義にや、東國にひやう、津輕にひやうあぎ、加賀にはひやうといふ、赤莧をあかひゆとよめり、染色部に入たり、馬齒莧をうまひゆとよめり、相模にいぬひやうといふ、今いふすべりひゆ也、加賀にすんべりひやうといふ、白莧は唐ひゆ也、五色莧は花ひゆ也、又まひゆといふは、常のひゆにや、

〔本朝食鑑三柔滑〕莧訓比由、本朝式亦同、

集解、田野家園處處多有之、其下種培養者長大也、其野生者細小也、狀類荏藍雞冠、而長大者四五尺、大抵三月撒種、苗葉似藍而小圓有皺文、莖葉俱可作蔬茹、六月勁梗不堪食、開細花成穗、或著莖結子、其穗中細子扁而光黑、與雞冠子相同、九月收之、不收則至冬不凋、又有紅莧、初嫩則赤、長而紅、老而紫、莖葉同色、可食可愛、霜後不變亦佳、

〔和漢三才圖會百二柔滑菜〕莧菜　和名比由○中略

按莧似藍而微圓有皺、六月開細花成穗、子扁光黑似雞冠子、人採莖葉爲蔬、野生者葉小、又有莖葉敷